

人 格 部 門

パーソナリティ研究の動向

高 橋 裕 行

(福井大学)

パーソナリティに関する研究は、学会発表の領域においても、人格、発達、教育、臨床、社会と広範囲にわたっており、関連する学会も多く、全部を一人で網羅することはほとんど不可能である。そこで本稿では、1995年7月から1996年6月までの主として教育心理学研究と心理学研究で発表された研究を中心として、その他青年心理学研究、心理臨床学研究など関連する雑誌論文での発表、および日本教育心理学会第38回総会と日本心理学会第60回大会での発表をもとに、1年間のパーソナリティ研究の動向について展望することにする。

1. 学会発表について

(1) 教心学会第38回総会および日心学会第60回大会について

教心学会の総会における発表について全体的に検討すると、人格部門の口頭発表は、4セッション(①検査・測定、②自己像、③児童・生徒の人格特性、④大学生の人格特性)であり、今総会より導入されたポスター展示による発表は、2セッション(①人格特性、②自我・自己)であり、全部で54件の発表が行われた。

人格部門以外にも、発達の部門の口頭発表において、②人生・生き方、ポスター発表において、⑦社会性・感情、⑨自律性、⑪アイデンティティ・性役割、⑰動機づけ、社会のポスター発表において、④進路選択、⑥現代青年の意識、など生き方への意識や態度など人格に関する発表が非常に多く含まれていたが、後述の研究内容についてその動向を展望する際、これらの発表は資料の収集あるいは発表者との討議をほとんど行い得なかったため含まないこととする。

今回の学会の発表形式についての特徴は、原理・方法や人格、教授過程、学習、測定・評価、臨床、障害などは「口頭発表」で、発達と社会は「ポスター発表」という慣行で固定化されている部門別による発表形式に手が加えられ、原理は口頭発表のみ、測定・評価と障害はポスター発表のみであることを除き、他の部門は口頭発表とポスター発表との両者を含んでいることである。いずれを口頭発表とし、いずれをポスター発表とするか規

する苦肉の策なのであろう。いずれにしても、人格の部門も、他の部門と同様、複数の分野が同時並行して発表が行われているため、1つの部屋で口頭での発表を聞いていると、他室の発表やポスターでの掲示時間に間に合わないという不都合が生じてくる。今総会においては、口頭発表とポスター発表とが同時並行して行われているため、桑原(1994)や井上(1995)の人格部門での展望で指摘してきた発表プログラム企画・設定の不都合がむしろ拡大されるに至ったと考えられる。

日心学会の大会の発表は、すべて口頭発表の形式で、7セッション、全部で51件の発表が行われた。ここでも、2つの分野の発表がそれぞれ別室で同時進行されるため、一方の発表を聞いていると他方を聞くことができないという状況であった。心理学全ての部門の発表大会を限られた日程内に開催するとなると、年々増大する発表数を考えて、企画をも含めて改善することが望ましいが容易ではないと思われる。

(2) 研究内容について一教心学会の発表を中心として

上述のような事情もあり、ここでは教育心理学会の口頭発表とポスター発表を中心として研究の特徴をみていくものとする。

これまでの学会発表では少なからずの研究があったアイデンティティに関する発表、生き方、性役割、女性に関する研究は、前年の総会の傾向を引き継ぎ、発達および社会部門としてポスター発表になっているため、人格部門はその内容がかなり異なったものとなっている。

まず、①の検査・測定については、水野他(2A3121)が乳児の気質を測定するため日本語版気質質問紙(RITQ)の本邦での妥当性の検討を試み、構造分析の結果、オリジナルな次元とは異なる次元が析出されることを見出している。山崎(2A3122)は、日本版幼児用MYTHを児童用に標準化することを試み、主因子法により2つの因子解が求められ、因子1が焦燥・攻撃性、因子2が競争性であることを見出している。藤井(2A3123)は、中学生用自己意識尺度の改訂を試み、原版での下位尺度間の相関と異なるが、3つの自己意識尺度を認めている。彼はこの尺度を用いて性差と学年差の検討を行い、いずれの下位尺度においても、女子が男子より、3年生が1年生より

高いことを見出している。これらの3つの発表は、既存の尺度の検討もしくは対象の拡大を意図して先行研究において使用された尺度を再構成し使用したものであった。

他方、酒井・久野(2A3125)は、Sprangerの6つの価値追求的精神作用の改訂された尺度を用いて、これらの下位尺度とYG性格検査との相関を検討している。YGの10の性格特性がこれらの下位尺度のいずれかと.30以上の相関をすることが認められている。彼らの尺度の開発は、価値観追求の検討を正面に据えた新たな試みとして興味をそそられるが、この価値追求的精神尺度によって測定されているものが何なのかという構成概念的妥当性の検討が必要なのではないかと考えられる。

藤田(2A3124)は、P-Fスタディの評定の分類に困難を感じる不明確語「なんで」の反応語に着目し、場面ごとの出現率を検討し、男子では場面10「君はうそつきだ…」が最も高率で、場面18「すいません。1つだけ…」が最も低率で、女子では場面8「君の女友達が…」が最も高率で、場面22「お怪我は…」が最も低率で出現することを、「なんで」の意味の解釈は全体に男女間で類似の傾向にあるが、場面によっては男子にE、E'が、女子にI'が多いことを見出している。

板津(2A3127)は、内田クレペリン検査を繰り返し実施した場合の変化・不変化を検討した研究にその対象とした諸指標が乏しいことから、11の指標について、高校3年生を対象に1回目を実施し2回目を3年後再実施した縦断的検討を行い、被験者間で各指標に有意な正の相関関係が認められること、被験者内で前半作業量、後半作業量、全体作業量いずれにおいても高い相関が認められることを見出し、3年の間隔をあけて検査を繰り返しても、UK全体の曲線経過は大きく変化しないと結論している。長谷川(2A3128)は、再検査効果を多段階選択肢評定について中心一周辺的評定の観点から検討を行い、自己意識の高評価性の項目、中評価性の項目、低評価性の項目などをダミー項目とともにランダムに配列し、1週間間隔で評定を求め、評価水準の高低に拘らず中心化が周辺化より顕著であり、変化の方向は低い項目がプラス変化によって中心的回答に、高い項目がマイナス変化によって中心的回答へ変化することを見出し、多段階選択肢評定においても従来の再検査効果と整合する効果が生じることを確認している。

セッション2(自己像)の発表は次のとおりである。

このセッションでの時津(2D3037)の事例的なアイデンティティ研究と溝上(2D3035)の方法論的検討とを除き、青年前期から青年後期までの自我確立との関連から派生した人格特性を検討したものである。

時津は、社会変動による著しい環境の変化において個

人の心理—社会的アイデンティティがどのような過程をたどるのかについて、日本に帰国した「中国残留婦人」1名を対象として、面接法による聞き取り調査と自叙伝の内容とを照応させながら検討している。社会変動によるアイデンティティ危機を乗り越えさせる力となったのは、日本人としての連続性を個人内で保たせる、「日本人であり」「日本女性であり」続ける過程であったとしている。彼女の発表は、37回総会において行ったアイデンティティ研究に必要な視座として「個人個人が生きて来た過程そのものを把握することであり」「一人の人間が生きていく過程をとらえようとするならば歴史や文化をも視野に含めるべきである」という主張を、具体的にどのような実現するか必ずしも詳細が明らかでなかったものを実証化したものと考えられる。

溝上は、法則定立的研究でありながら個性記述的研究には、回答者自身に自ら表出させる方法と調査者側が予め用意した次元の評定の重みによって個人の重要な領域とする方法とがあり、前者が内在的視点として主体の実際の意識体験に現れたものであるが、後者は外在的視点として主体の外側から主体の意識や行動を理解しようとするものであり、題材として個性記述的な自己評価の規定要因を、両視点の差異を検討している。彼は、「私はいろいろ不満や反省がないわけではないが、基本的に今のままの自分でいいと思っています」という自己評価文章を肯定した者を対象として、一方で「それはなぜですか」について自由記述を求め、他方で予め用意された肯定の規定要因56項目へのあてはまり度の回答を求め、併せて自尊感情を測定し、自尊感情の高い者は自由記述において内在的視点から生き方や人間関係、生活感情など何かしらあげることができ多くの規定要因を認めることができたが、自尊感情の低い者は主に言い訳や弁解しか表出できず該当する規定要因がなかった。溝上は、これらの結果から両視点の意味は、自尊感情が外在的視点としての数多くの要因に支えられているとき、個人の意識の中で価値ある要因が内在的視点となって表出されるものと考えている。

村田・松井(2D3031)は、中学生から大学生までのコンピテンスを把握することを目的に、認知されたコンピテンス測定尺度(桜井, 1983)を改訂して5尺度からなるコンピテンス調査票を作成し、学習コンピテンスは高校1, 2年が中学2年や大学4年より低く、課外活動コンピテンスは中学2年が大学3年より高い傾向があり、異性友人関係コンピテンスは高校1年が大学2, 3, 4年より低いことを見出し、学生のコンピテンスが精神発達上の特徴や外的状況が反映していると考察している。長沼(2D3032)は、精神的健康(GHQ)と職業的アイデンティティ

から大学生の自己受容 (SA) を検討し、研究 1 において SA の得点から高・中・低の 3 群に分け、GHQ の総得点は低群が中群より、低群が高群よりそれぞれ得点が高いことを見出し、専攻別では初等教育の学生が教育学の学生より自己受容の「精神的自己」において低く将来のイメージや目標の有無によって影響を受けるのではないかという示唆が得られたため、研究 2 において研究 1 の被験者の一部に面接調査を行い、自己受容の過程や内容に 3 つのパターンのあることを報告している。第 1 は、主体的・客観的に自己の長所・短所を把握した自己認知をした上で変容の可能性に開かれた自己を受容し自己実現をめざそうとするものであり、第 2 は、主体的・客観的に自己を認知しながら自己の変容の可能性を閉ざして自己実現をめざそうとするものであり、第 3 は、自己認知の時点で客観的な側面から目を背け自己実現をめざそうとするものである。仮説的モデルとして、自己受容には自己認知を前提に自己変容、自己実現していくプロセスの中に位置づけられると想定されている。この発表は、多くの研究者が尺度を作成し、質問紙法によって資料を収集しコンピューターを駆使して多変量解析を行うという方法をとっている中で、想定された仮説的モデルが正鵠を得ているかは暫時留保するとしても、自己受容の深さとパターンについて分析を試みたという点で新たな研究の展開の先鞭をつけたものと思われる。石木 (2D3034) は、「あるべき」自己像と「ありたい」自己像との差異を「自分にとっての必要性」と「他者にとっての重要性」との関係から検討し、他者にとっての重要性において「ありたい」自己像と「あるべき」自己像との間に差異が認められ、あるべき自己像の方が高く、自分にとっての重要性と他人にとっての重要性との評定値は「ありたい」意識において相関するが、「あるべき」意識において相関しないことを見出し、「ありたい」像が自分にとっても他者にとっても共に重要と考えるのに対し、「あるべき」像が他者にとっては重要であるが自分にとっては必ずしもそれに対応しないと考えている。彼はまた、「あるべき」像の意識しやすさと「ありたい」像の意識しやすさとに強い相関があることから、「あるべき」像を意識する人格基盤と「ありたい」像を意識する人格基盤とがある程度共通していると考えている。野上 (2D3036) は、身体に関する情報とボディーイメージ、自己、対人場面行動との関連を検討し、4 つの想定された全ての領域における身体情報に対する態度に性差があり、女性が男性より得点が高く、ボディーイメージでの身体意識度は女性が男性より高く、その満足度に女性が男性より低く、女性においてのみ身体意識度と満足度との間には中程度の負の相関があり、身体情報に関する態度と身体意識度との間に

は男女いずれとも中程度の正の相関があり、満足度との間には女性においてのみ中程度の負の相関があり、身体意識度と公的自意識との間には中程度の正の相関があり、満足度と劣等感の間、満足度とシャイネスとの間にはそれぞれ女性においてのみ中程度および弱い負の相関があることを認め、女性においては身体に敏感なほど、満足度が低くなり、劣等感が強くなること、他者の評価を気にする程度が大きいほど理想自己との比較による不満が大きいほど、対人場面において不安や緊張を感じることを見出している。この発表は、結果の分析において用いられた変数の相関分析と身体情報に対する態度の得点によって群を設定し群間の分散分析を行っているが、最後の結論にまとめることが目的なのであれば、因果関係を想定した重回帰分析によるパス解析を試みた方が理解しやすいのではないと思われる。山本 (2D3038) は、高校生を対象として「希死念慮」と充実感や背景的要因について検討し、「死にたいと強く思った」という希死念慮群が 6.7%、非希死念慮群 54.8% であり、希死念慮群と非希死念慮群との間には充実感と鬱状態で有意な差異があり、希死念慮群が充実感が低く鬱状態で高いこと、死にたいと思った理由は対人関係では友人、家族のこと、自己に関しては生きる意味、勉強のことであり、希死念慮を誰かに話したかについては話さなかったが 70.4%、曖昧に話したが 22.5% であり、直接的な表現を行うということは「生か死か」という両極でしか見られない視野の狭窄性を示唆するものであり、教育的配慮の必要性を指摘している。この発表は、数量的な調査研究が目的であるならば、被験者の数を増やして検討することが望まれる。

セッション 3 (人格特性) は、人格の部門におけるポスター発表による初めての試みであり、掲示時間から前半と後半に別れ、内容的に前半は人格特性の新たな尺度の作成とその測定的研究が、後半は家族像や子どもに対する生きがい感、父親像、住宅環境、テスト前不安、中学校進学と、発達と関連した人格との関係を検討した研究が配されている。

佐藤 (3PB01) は、Don Richard Riso の性格類型論によるエニアグラム性格類型質問紙 (RETI) の高校生への適用可能性と性格行動の予測可能性を目的として探索的に検討し、144 組の二者択一式の検査法の一部を中学生や高校生に適用するため文意を変えない範囲で改定し、性格の基本タイプの確定が可能であることを示し、さらに事例を提示し基本タイプの確定に基づく心理的な成長の方向と、分裂方向 (非自己実現方向) を予測している。吉田 (3PB02) は、PRIVACY 志向性と人格特性との関連と PRIVACY 志向性尺度 (OTPS) の構成概念的妥当性の検討を大学生を対象として行い、OTPS の因子分析により先行

研究と同様の安定した因子構造が得られること、OTPSの因子得点とYG性格検査の性格特性との相関分析を行い、気分の変化や攻撃性と「自由意志」とが、劣等感や神経質と「遠慮欲求」とがのんきと「隔離」とが弱い正の相関をすることを、思考外向と「孤独」とが、支配性や社会的外向と「孤独」や「遠慮欲求」、「閉居」とが弱い負の相関をすることを認め、自尊感情の高群のみにて主観性と「友人との親密性」とが、抑鬱や気分の変化、攻撃性と「自由意志」とが、社会的外向と「家族との親密性」とが正の相関をすることを、気分の変化や支配性と「遠慮欲求」とが負の相関をすることを認めている。この発表は、相関分析をしながら、結果の記載は、例えば気分の変化の大きい人は「自由意思」を選択する傾向があるなどと述べており、分析方法に従った適切な表現となっていないことに批判の余地のあるところである。大橋(3PB03)は、「自己」を「自分のことを自分であると感じているそのもの、ないしは、そのような感じを基盤として成立している、意識あるいは意識現象」と再定義し、「離人感」に関する質問紙を開発し、その質的内容を検討するため、高校生から主婦を含む社会人までを対象として、16項目からなる質問紙を作成しており、バリマックス回転による因子分析を行ったところ2因子解が得られ、第1因子が「日常的離人傾向尺度」、第2因子が「病的離人傾向尺度」とそれぞれ命名された。彼は、それぞれの下位尺度に対する得点分布を検討しており、日常的離人傾向尺度は正規型に分布しているのに対し、病的離人傾向尺度はポアソン分布型を示しており、日常的離人傾向尺度の項目は普遍的に起こりやすい事態を、病的離人傾向尺度の項目は病的事態に近い内容をとらえていると考えている。小塩(3PB04)は、自己愛パーソナリティ障害の臨床的徴候として過度の依存性が指摘されているが、自己愛と対人関係についての実証的研究が皆無であることに着眼し、自己人格傾向と依存性との関連を意識的側面と投影的側面から検討している。自己愛人格傾向は質問紙(NPI)によりとらえられ、項目の因子分析の結果「優越感・有能感」「自己顕示」「独自性」の因子が析出され、依存性の意識的側面は質問紙、投影的側面はTATよりとらえられ、それぞれ下位尺度として「依存欲求」「依存の拒否」「統合された依存」から構成されている。NPI総得点や優越感・有能感・自己顕示は「統合」「投影依存」「投影統合」と正の、「投影拒否」と負の相関を、自己顕示は「依存」「統合」「投影依存」と正の、投影拒否と負の相関を、「独自性」は「依存」と負の相関を示した。この発表は、自己愛人格傾向を測定するためNPIを用いているが、この質問紙によってとらえられているものは誰にでも多少ある自己愛傾向を測定したものであり、発表者が

意図しているようなパーソナリティ障害としての自己愛をとらえていないのではないかと考えられ、両者を厳密に区別する必要があるだろう。田中・木島(3PB05)は、Cloningerの気質と性格の7次元モデルと状態不安との関連を検討し、状態不安の得点を予測する重回帰分析に、性、年齢、気質(新奇性追求、損害回避、報酬依存、固執)、性格(自己志向、協調、自己超越)などの変数を投入したところ、損害回避と自己志向とが有意に予測することを見出している。田邊(3PB07)は、社会的知能としての「賢さ」を「知能を状況に生かすような人格上の高位な判断」とみなして、具体的な場面でどのように生かされるのか検討している。賢さの因子として14因子が挙げられ、困難場面として15状況を設定し、困難場面で賢さのどの因子が必要か評定を求め、自分自身場面では活動性が、社会場面では要領の良さ、進路場面では知識量や判断力、自己認知、多面的思考力、計画性が、友人場面では自己コントロールや他者柔軟受容性が、家庭秘密場面では洞察力や行動力が必要とされている。吉村(3PB08)は、正常者を対象として、ロールシャッハ反応の逸脱言語表現の1つである情緒的明細化(ALR)の採点基準とカード別の出現頻度を検討している。ALRの採点基準は、情緒性の付与された反応(AR)と思考性の付与された反応(TR)とに大別され、カード別ではXカードがM・FM反応の出現率に比して多く出現し、VIカードが著しく少ないことが見出されている。

藤森(3PB09)は、家族イメージ投影図と質問紙法(FACES)によって測定される家族機能の凝集性と適応性との関連を検討するため相関分析を行い、三者間距離(自己と父、母それぞれとの距離の合計値)と凝集性、適応性それぞれと負の、自宅外生の父の大きさと凝集性とに正の、自宅生の父の大きさに対する母の大きさの比と適応性とに正の相関を見出している。形式的なことを述べて不本意であるが、この発表は、脱字が少なからず有り、文の指定と図の位置との不一致、文で表現されている相関の値が表のいずれであるのか判然としないなど不備なところが少なくなく、発表論文送付前の自己点検が必要なのではないだろうか。山田・安藤(3PB10)は、子ども時代に経験した食卓状況や母親の食事作りの態度が、特に女子において、料理や食事につわる事柄に影響を与えるであろうと仮説し、現在の食行動を尋ねる項目、母親への同一視を尋ねる項目、小学校時代の食卓状況を尋ねる項目、小学校時代の母親の食事作りの態度を尋ねる項目、小学校時代の母親の養育態度を尋ねる項目などを用いてパス解析を行い、食行動異常を中心として分析を行い、母親の「統制」的な養育態度が食事場面で「躰」として反映されたとき、「食事強迫」や「食事制限」などの異常

を引き起こすという因果関係予測モデルを提示している。この発表は、食行動異常を中心として分析されていてその価値を否定するものではないが、適切な食行動の形成のために、前述の変数を用いながら因果関係予測モデルとして解明されることが有益なのではないかと考えられる。木村 (3PB11) は、母親の子どもに対する生きがい感について検討し、予備面接を基に子どもに対する生きがい感の25項目の尺度が作成され、本調査でバリマックス回転による因子分析を行ったところ、5因子が析出された。第1因子は「母親としての存在や責任」、第2因子は「子どもに未来を託すこと」、第3因子は「子どもを通して成長すること」、第4因子は「子どもに支えられること」、第5因子は「子どもが存在していること」と命名された。これらの因子を構成する尺度は、充実感尺度と下位尺度である「充実感気分一退屈・空虚感因子」と相関が算出され、第4因子以外は有意な正の相関が認められ、ある程度の妥当性が得られたものと考えられている。松岡 (3PB12) は、高校生から成人までを対象として、父親の否定的な行動に対する評価と娘の自己受容との関連を検討し、自己受容の得点を基準として高 (H)、中 (M)、低受容群 (L) に分け、否定的行動への評価得点に対して分散分析を行い、「干渉・頑固」「品格のなさ」「利己的」の各因子で群間に差異が認められ、高校・大学・成人を通して、M や L 群それぞれは同程度の幻滅度を示すが、成人では H 群が M や L 群と差異が少ないが、高校・大学では H 群が M や L 群より高い幻滅度を示している。この発表は、このような結果についてどのように考えるか何ら触れていない。渡辺 (3PB13) は、住まいと性格形成との関連を検討し、住まいの日当たりや風通し、静けさ、リビングルーム、個室の広さなどの各変数と YG 性格検査で測定される下位尺度との関連を、男女、住まいへの肯定・否定を要因とした2要因分散分析を行い、住まいの各変数で性格特性の差異を見出している。この発表は、住まいの基本的要素がそこに居住する人の性格形成の一因となっていると論じているが、分析方法からいってもそこに因果関係まで認めてしまうのは性急過ぎると思われる。塩谷 (3PB14) は、テスト状況の段階別に不安を検討することが有効であると考え、テストより前の段階の不安を「テスト前不安」と呼び、時期を限定せずに「テストに向けた勉強をしている段階で感じている不安」と定義し、探索的に、テスト前不安、懸念、情動性、テストと関連のある思考、テストと関連のない思考などの変数を測定し、各変数間の相関分析により、いずれの変数間においても中程度から高いまでの正の相関を見出している。古川他 (3PB15) は、中学校入学直前の小学校6年生を対象にして、中学校入学に対する期待、

不安、目標について検討し、小学校での適応水準を基準に高・低群にわけ、期待において群間の主効果と期待の領域と性との交互作用があり、高群が低群より高く、男子では部活・先輩への期待が高く、女子では教師への期待が高く、不安において群間や性、不安の領域に主効果があり、低群が高群より高く、女子が男子より高く、学業との両立が高く、教師への不安が低く、目標の達成度において群間の主効果があり高群が低群より達成自信度が高かった。この発表は、目標という変数を加えたことに新奇性が認められる。

セッション4 (児童・生徒の人格特性) の発表は次のとおりである。

塩見・永田 (2D3041) は、高校生を対象として無気力と自己概念との関連を検討し、自己概念を測定する自己イメージ質問検査 (OSIQ) が因子分析され7因子が抽出され、「社会的適応」「肯定的家族像」「肯定的自己能力評価」「心的安定」「性に対する積極的態度」「肯定的将来像」「衝動統制」であり、また無気力の項目を測定する項目の因子分析が行われ「学生生活不適応」「消極的交友関係」「意欲減退・あきらめ」「打ち込む領域の欠如」「将来の展望の欠如」であり、自己概念の因子から構成される項目の尺度得点を説明変数とし、無気力尺度の全体得点を目的変数とした重回帰分析を男女別に行ったところ、決定係数は男女それぞれ.647,.680であり、 β 値が有意なのは上位より「社会的適応」「肯定的将来像」「肯定的自己能力評価」が正の寄与を、「性に対する説教的態度」が負の寄与を示している。この発表は、被験者として普通高校と工業高校の生徒を対象としており、結果を高校別に比較検討しながら、学校現場で浮上してきている問題の一端が明らかになったのではないかと考えられる。牧田・荒木 (2D3042) は、中学生を対象に、自ら作成した学校内不安尺度と自尊感情や学業成績との関連を検討し、自尊感情と学校内不安全体とその下位尺度との間に負の相関があり、特に授業場面で中程度の負の相関が認められ、休み時間の場面でもやや弱い相関があり、学校内不安全体得点を基準として高、中、低の3群に分け群間での教科の成績を検討したところ、不安の低い群は認知教科での成績がいずれも高いことが示されている。宅 (2D3043) は、中学生、高校生を対象に、心的問題の顕在化、潜在化に関連する要因として「衝動的行動傾向」「イライラ感」を取りあげ、学校生活に対する意識と攻撃性との関連を検討し、衝動的行動傾向とイライラ感いずれも学年間、男女間で差がなく、発達や男女別に関係なくみられること、衝動的行動傾向とイライラ感の得点それぞれの高低で4群(順次、HH、HL、LH、LLと略)に分け、学校生活に対する意識と攻撃性を検討したところ、HHは学校適応

が最も低く攻撃性が高く、HLは仲間志向が最も高く、LHは学校適応が低く友人や仲間を排斥し孤立志向が高く、LLは学校適応が最も高く攻撃性が低いことを示している。遠山(2D3045)は、中学校進学に伴う自己評価の変化を縦断的に検討し、自己評価的意識インベントリー項目に対し主因子法による因子分析を行い、「自己否定感・劣等感」「自己受容」「自信・自負心」「自立性」の4因子が抽出され、小学校での下位尺度それぞれでの因子得点を基準に上位群(H)、中間群(M)、下位群(L)に分け、入学直後時に全ての自己評価の因子においてH群は低下しL群は上昇すること、入学直後時と3か月後においてH群とL群との得点の差は継続することを見出し、さらに学校環境の変化への認知についての自由記述に肯定から否定までの観点から重みづけ得点を与え主因子法による因子分析を行い、「中学生としての役割」「学習活動」「他者からの期待」「制約」の4因子が析出され、入学直後時に自己評価の全ての因子と役割取得とで、自立性と環境認知とで相関があり、自己否定感・劣等感のL群が役割取得と他者の期待とを肯定的に受けとめ、自信・自負心のH群が役割取得と制約とを肯定的に受けとめ、自立性のH群は役割取得と他者からの期待を肯定的に受けとめており、児童は中学校に入学したとき自分の考えている中学生としての役割に照らし合わせて自己を評価すると考えている。

セッション5(自我・自己)は、セッション3と同様ポスター発表であり、掲示時間から前半と後半に別れ、内容的に前半は自我同一性や愛着・内的作業モデルに関するものであり、後半は内容を特定化できない幅広い研究が配されている。

水野(5PC01)は、社会性確立と自我確立との2面の組み合わせから、社会型、自我型、成熟型、未熟型に分け、交流分析の自我状態と透過性調整力との関連を検討し、社会型はNP、A、FC、ACが高く、人に積極的に働きかけ協調的、社交的にふるまう傾向があるが、周囲に左右されやすく、自我型はACが低く、人と協調的に行動する面が弱い、自己コントロールする力が高く、成熟型はCP、NP、A、FC、透過性調整力が最も高く、自分をコントロールして対人関係を営んでおり、未熟型はCP、NP、FC、透過性調整力が最も低く、十分に自分を発揮していないとしている。谷(5PC02)は、自我同一性と対人恐怖的心性との関係を検討し、共分散構造分析によって日本におけるアイデンティティ危機のモデルを構築することを目的に、「個一関係」葛藤尺度、Rasmussenの自我同一性尺度の第II、V、VIの下位尺度、対人恐怖心性尺度を実施し、自律性はアイデンティティ危機と対人恐怖的心性に影響を与え、アイデンティティ危機は対人恐怖

的心性に影響を与えると考えて共分散構造分析を行い、当てはまりの良さはGFIが.917、AGFIが.824となり、適合性の高いモデルを得ている。住友(5PC03)は、重要な他者との相互作用として愛着と、主体側の要因としての達成動機を取りあげ、これらと自己受容との関連を検討し、愛着の対象得点と自己充實的達成動機、競争的達成動機の因子得点とを要因とする因子分析を行い、自己受容の精神領域での自己受容において男子は自己充實的達成動機が高いほど、女子は恋人と親友への愛着の高いほど自己受容的であり、母親への愛着と競争的達成動機とに交互作用が認められ、男子では自分自身を深めたいという気持ちだが、女子では親密な関わりの認識に支えられることが自己受容に重要な意味を持つと考察している。吉田・安藤(5PC04)は、内的作業モデル(IWM)と母親や友人との関係認知、自己受容との関連をパス解析を用いて検討し、3群いずれとも、母からの自己受容から与えられる影響と友人からの自己受容から与えられる影響はそれぞれ自己受容と有意な正の偏相関であり、群別に、安定群では、IWMが母からの受容感に与える影響は弱く、IWMが友人からの受容感に与える影響は有意な正の偏相関であり、IWMから与えられる影響は有意な正の偏相関であり、アンビバレント群では、IWMが母からの受容感に与える影響とIWMが友人からの受容感に与える影響とはそれぞれ有意な負の偏相関であり、IWMから与えられる影響は有意な負の高い偏相関であり、回避群では、IWMが母からの受容感に与える影響はなく、IWMが友人からの受容感に与える影響は有意な負の偏相関であり、IWMから与えられる影響は有意な正の相関であることを見出している。自己受容に及ぼすIWMからの直接的な影響は、安定群と回避群とが正の偏相関であるが、アンビバレント群は負の偏相関であることを示しており、対照をなしている。久保(5PC05)は、IWMの個人差と対人情報処理タイプとの関連を検討するため、自由記述による親子状況ピクチャー尺度を開発し(PARS)、「語り方」を基準にA(とらわれ型)、B(回避型)、C(自己体験型)、D(情緒希薄型)に分類を行い、男性はB群が、女性はC群が多く、母A群はC群より母との場面を否定的に、父B群はC群より父との場面を否定的に捉えており、親子関係についての語り口からいくつかのタイプに分類が可能であることを見出している。この発表は、残念ながら、IWMの代表的な顕型である3群(Ainsworth et al)と語り口との関連が報告されていない。

杉浦(5PC06)は、セルフモニタリングの中に自己提示を管理できるという認識(演技能力)と他者への関心・依存(他者志向)の2側面が含まれており、これら2つの変数の組合わせと他の心理学的変数との関連を検討し、演

技能力と他者志向のそれぞれの得点の中央値を基準に高低の4群に分け、自己評価と社会不安との関連を検討し、演技H—他者Hや演技H—他者Lは演技L—他者Hや演技L—他者Lと比較して自己評価が高く社会不安が低く、他者志向の高低を問わず、演技能力の高低による影響が強いことを見出している。三木(5PC07)は、ライフスタイルとして有職女性、専業主婦の他に農業従事者を加え、30代から50代までの女性を対象に相互依存的・独立的自己理解の自己意識と同一性の在り方との関連を検討し、全体として40代に独立的な自己理解が主となり、50代にかけて相互依存的自己理解も高まっていくこと、ライフスタイルとして農業従事者は相互依存的自己理解が他の2群より高く、相互依存的自己理解、独立的自己理解、同一性との可能な2つの組み合わせによる相関はほぼ同様の値を示しているのに対し、有職女性は独立的自己理解と同一性との相関が高いことから、農業従事者の関係性を重視した対人関係の在り方が反映されたものと考えている。この発表は、農業従事者を中心に捉えて有職形態、年代との組み合わせによるライフスタイルの数量的な検討を加えた初めての研究と考えられる。今後、このような研究が対象を広げて、ライフスタイルを反映する鋭敏な指標を加えて加速していくのではないだろうか。岩田(5PC08)は、未来の出来事に対する時間的距離感がその出来事に対する重要性に影響されることから、時間的展望の距離感と重要性を取りあげ、制御の所在性(LC)との関連を検討し、距離感の項目の因子分析を行い、「社会・経済的成功と他人からの尊敬」「社会人としての自立」「家庭の充実」「身体的衰えと死」の4因子を、重要性の項目の因子分析を行い、「社会・経済的成功」「家庭の充実」「精神・経済的依存」「身体的衰え」の4因子をそれぞれ析出し、距離感と重要性とがほぼ同じまとまりを持つと認識されており、未来の出来事がそれに対する認識よりその出来事の持つ特徴によってまとまりをなすと考えている。さらに、被験者をLCの得点を基準に高・低群に分け、距離感と重要性の各因子得点それぞれにおいてt検定を行い、距離感の第2、4因子において高群が低群より高く、高群が低群に比較して現在の広がりや人生の長さを時間展望していると考えている。この発表は、時間的展望に関する最近の研究の動向を反映しているのが特徴であるが、行うべき統計的検定を行っていないこと、用いた統計的検定の方法が誤っていること(α の誤りをする確率)など惜しまれる点が認められる。

セッション6(大学生の人格特性)の発表は次のとおりである。

菅野他(2A2122)は、神経質傾向と人間の攻撃性との関連の詳細な検討の前提として神経質傾向の因子分析的検

討を行い、抽出された因子と因子分析する前に構造化の際に設定された次元は、「被暗示性と敏感性」は表出性の否定的面と、「強迫性と敏感性」は肯定的面と関連があったが、「内省性と敏感性」は次元が分化していず、この因子に負荷している項目の負荷量が負の方向を示すため内容的に「反内省的と敏感性」を表わすとしており、敏感性がいずれの因子にも属することからこれが神経質傾向の基底にある動因と考えており、結論として神経質傾向は敏感性を基底因とし、強迫性、被暗示性、反内省性を動因とする心的傾向であるとしている。佐々木(2A2123)は、「見捨てられ抑うつ」が対人関係において活性化されやすいことから、対人関係の中で体験している「自己の存在感そのものの喪失感」を捉える「見捨てられ抑うつ」尺度の作成を試み、筆者自ら作成の「見捨てられ抑うつ」の項目に新たに項目を付加して因子分析を行い、第2因子に既成の項目が多数含まれていたことから新たに「見捨てられ抑うつ」尺度(ADS)とし、再度ADSに因子分析を行い、「孤立無援・見捨てられ感」「自己不信・無力感」「対人不信・無力感」の3因子を抽出し、これらの尺度が「自我同一性障害による見捨てられ感」に近いと考えている。原田(2A2124)は、非合理志向と政治的態度との関連を検討し、筆者自ら作成の非合理志向尺度と政治的態度尺度それぞれを大学生に実施し、非合理志向得点と政治的態度の復古主義との有意な相関以外は特に体系的な関係が認められないこと、男女の間で非合理志向得点と政治的態度との結びつきが異なり、女性の方が非合理志向の傾向が強いほど復古主義や国家主義などの保守的政治態度と相関することを認めており、全体として非合理志向と政治的態度との間に因果関係の存在を想定させるようなつながりが見出されなかったと結論している。佐藤(2A2125)は、10～16年前に作成されたと同じ性役割に関する調査項目を用いて、女性自身の態度と女性から見た親の態度との2つの観点から回答を求め、親の考えで抽出された「伝統的結婚観」「伝統的性役割観」「家庭第一主義」「自己形成」「自律性尊重」の5因子を中心に、その異同を検討している。「伝統的結婚観」は親が娘より固持していること、「伝統的性役割観」は一部の項目を除き親も娘も否定的であること、「家庭第一主義」は娘が親よりも否定的である項目と、娘も親も肯定的である項目とに折半されること、「自己形成、自律性尊重」は娘も親も肯定的であることを見出している。この発表は、性役割について女性自身と女性に映る親の態度とを取りあげたところに特徴があるが、性役割観と何らかの自己意識に関する変数との関連、自己意識の得点を基準とした群間の性役割観の差異の検討、女性自身の内部にある性役割観の角逐とその超克などが性役割観の一層の理解を促

すのではないだろうか。富重(2A2126)は、「対異性行動の抑制化」という問題を念頭に置いて、中・高校生を対象に異性不安を中心に検討し、性と学年との分散分析により男子の方は女子より不安が高く、有意ではないが高学年の生徒ほど得点が高くなる傾向があること、男女とも自己のジェンダーに肯定的であり不安との関連が認められないこと、異性との交友形態は異性の友人がいない群が他の群より不安の高いこと、学校生活が充実していないと感じる群が感じていない群より不安の高いこと、人間関係や身体に悩みを感じている群はそうでない群より不安の高いことなどを認め、従来の性に関して生徒の異性関係は抑制すべきものとした指導・教育に疑問を投げかけている。吉田他(2A2127)は、アパシーと自己愛との関連の詳細な検討の前提として、アパシーの因子構造を検討し、第1因子に関わりの対象として自己に関する全部の項目が含まれ、因子負荷量と項目内容を考慮して「合理化を伴った補償」と命名し、第2因子に関わりの対象として他者に関する全部の項目が含まれ、関わりに方向として両因子とも「回避」と「対峙」の両側面を含んでおり、項目内容を考慮して「隔離を伴った拒絶」と命名し、先行研究が指摘している特徴とを勘考して内容的妥当性があると考えている。丸山他(2A2128)は、自己愛のいかなる側面がアパシーと関連するのか検討することを前提に、自己愛の心的構造を検討するため、一方でKohutの理論に基づき自己愛の構造化を行い、この構造化に従って項目を新たに作成し、他方でRaskin & Hallが作成したNPI(Narcissitic Personality Inventory)を翻訳した項目を用いて質問項目を作成し、この作成された質問項目に因子分析を行い、「誇大感・理想化を伴った自己—自己対象関係」「愛他性を伴った自己—自己対象関係」「自尊感情を伴った自己—自己対象関係」の3因子を抽出している。彼らは、現代青年の示す自己愛が第1に、自分に対する誇大な感覚を持ち、他者に対して自己の都合により理想化を求めるというように、自我が肥大化しており、第2に、自我が肥大化し未熟であるため、自己愛の傷つきを恐れて現実と直面できないと推量している。

2. 学会誌にみるパーソナリティ研究の動向

—教育心理学研究を中心として—

1995年度7月から1996年度6月までの学会誌に掲載された論文を中心として人格関係の研究を概観したところ、尺度構成に関する研究、幼児期・児童期的人格形成に関連した研究、青年期に関連したもの、成人期以降の問題、およびその他に分類することができる。そこで、ここではこの分類にしたがって人格研究の動向についてみることにする。

(1) 尺度構成に関する研究

土肥(1996)は、従来の性役割獲得の過程を説明する発達の同一視理論や社会的学習理論、認知発達理論に加えて、近年提唱されるようになった、男性的・女性的というジェンダーに基づいた対象の認知、情報処理を方向づけるジェンダー・スキーマ理論に着目し、この理論が両性具有性を形成するに至る説明に飽きたらず3つの問題点を挙げ、同性的・異性的として認知される性格特性の両方を自己概念に取り込もうとする自我の働きを想定し、ジェンダー・アイデンティティを概念化している。彼女は、ジェンダー・アイデンティティの3つの下位概念「自己の性受容」「父母との同一化」「異性との親密性」を仮定し、ジェンダー・アイデンティティを測定する青年後期から成人初期向けの尺度を作成している。「自己の性受容」「父母との同一化」「異性との親密性」のそれぞれを表現した、男性用56項目、女性用57項目を用意し、探索的に因子分析を行い、第1因子は異性との親密性に、第2因子は性の受容に、第3因子はジェンダーモデルとしての父母の同一化に関する項目にそれぞれ高く負荷し、3つの下位概念との対応が見られ、第3因子までに高く負荷した項目で3つの下位尺度の候補とし、内的整合性を高めるよう項目の入れ換えを行い、男女それぞれ10項目ずつの下位尺度を作成している。土肥は、共分散構造分析によりジェンダー・アイデンティティの最適なモデルを構築するため、ナルモデル、単一因子モデル、3因子相関モデルの比較検討を行い、 χ^2 値の差の χ^2 検定やGFI、AGFI、AICなどの指標の比較により、男女とも、3因子相関モデルが単一因子モデルより、単一因子モデルがナルモデルより全体的な評価が高いことを見出している。

成田(1995)は、自己効力感が具体的な個々の課題や状況に依存して特異的に行動に影響を及ぼすものと長期的に一般化した日常場面における行動に影響を与えるものとに大別され、後者の自己効力感がある種の人格特性的な認知傾向とみなし、特性的自己効力感(Generalized Self-Efficacy)と呼んでいる。彼らは、生涯発達の視点に立ち、幅広い年齢層で使用可能性を考慮して、特性的自己効力感を測定する尺度をSherer et alのSE尺度に準拠して作成している。成田他は、13歳から92歳までの男女1641名を対象に、SE尺度を翻訳して5件法で回答を求めている。併せて、妥当性を検討するため、抑うつ性尺度CES-D、自尊心尺度(Rosenberg)、性役割尺度BSRI、主観的健康感尺度を実施している。SE尺度の得点分は、男女それぞれ、正規性、歪度、尖度などの指標から正規分布と見なせるものであり、SE尺度の因子構造を検討するため主因子法による因子分析を行い、男女別、各年

年齢群別、全体いずれとも第1因子の固有値が第2因子以下に比べて非常に高く、性や年齢によらず安定した1因子構造であることが示された。SE尺度の信頼性は性、年齢に関わらずいずれの場合も α 係数が.80以上であり、満足すべき内的一貫性が得られ、2週間間隔での再検査信頼性は、.73とやや低い値が得られた。SE尺度の構成概念的妥当性は他のパーソナリティ尺度との相関分析で行われ、CES-Dとの相関が男女別、各年齢群別でほぼ同様の $-.25 \sim -.37$ の中程度の負の相関を示し、自尊心尺度との相関が男女別、各年齢群別でほぼ同様の $.44 \sim .63$ の相対的に高い正の相関を示し、性役割尺度の男性性尺度得点との相関が男女別、一部の年齢層を除く各年齢群別でほぼ同様の $.31 \sim .49$ の中程度の正の相関を示し、主観的健康感尺度との相関が男女別、各年齢群別でほぼ $.20$ 前後と弱い相関が示され、いずれのパーソナリティ尺度においても予測された方向の相関が見出され、構成概念的妥当性は性・年齢群に関わりなく支持されている。

(2) 発達段階別の人格に関する研究

笠井(1995)は、無気力状態が高校生や中学生、さらには小学生まで、広い年齢層に及ぶことが指摘されていることから、一般的な児童・生徒の気力感の容態と、その関連要因や具体的な問題行動との関連を検討し、調査Iにおいて小・中学生の日常生活の無気力感を測定する項目を、①授業・学習態度、テスト有能感、②生活のリズム・疲労、③生活(人生)の目標・将来の見通し、④達成感・動機づけ・自己効力感、⑤社会的場面での非能動性・ひきこもりなど5つの観点から収集し、小学5、6年生、中学2年生を対象に実施し、主因子法とバリマックス回転による因子分析を行い、中学生では、項目作成時の観点と解釈可能性とを考慮して5因子を抽出し、固有値の大きさから順に因子は、「意欲減退・身体不全感」「充実感・将来の展望の欠如」「消極的友人関係」「無力感・あきらめ」「積極的学習態度の欠如」と命名され、下位カテゴリーごとの α 係数による信頼性係数は $.76 \sim .56$ であり、まずまずの信頼性であり、小学生では、中学生と同様の基準で、「充実感・将来の展望の欠如」「学習不適応感」「身体不全感」「社会的場面での非活動性・ひきこもり」「非活動性・無力感」と命名され、下位カテゴリーごとの α 係数による信頼性係数は $.71 \sim .58$ であり、まずまずの信頼性であった。調査IIにおいて無気力感と日常生活の諸側面との関連を検討し、調査Iで得られた結果を基に、因子ごとに因子負荷量の大きなものから、内容、表現を考慮して下位カテゴリーごとに4項目ずつを選び無気力感尺度とし、さらに日常生活について質問項目を設け、小学5、6年生と中学1、2年生に実施し、中学生では、下位カテゴリーの中で「意欲減退・身体不全感」

の得点が最も高く、次いで「積極的学習態度の欠如」であり、最も得点の低いのが「消極的友人関係」であり、性差については女子が「充実感・将来の展望の欠如」を強く感じ、男子が「積極的学習態度の欠如」「消極的友人関係」を強く感じている。下位カテゴリー間の関連は全てのカテゴリー間に有意な正の相関が見られ、無力感を感じている生徒は特定の領域に無力感を感じているというより、日常生活全般に無力感を感じていることを反映している。日常生活との関連は、全般的にそれほど強い関連ではないが、「積極的学習態度の欠如」と学業成績と正の、学習時間の負の、「無力感・あきらめ」と学業成績と正の中程度の相関があり、仲良しグループの有無について「ない」と回答した生徒は「意欲減退・身体不全感」を除く全ての下位カテゴリーで得点が高く、親友の有無について「ない」と回答した生徒は「積極的学習態度」を除く全ての下位カテゴリーで得点が高く、グループや親友といった充実した友人関係を持ってない生徒は無気力感が高いことを示している。小学生では、下位カテゴリーの中で「学習不適応感」の得点が高く、最も得点の低いのが「身体的不全感」と「消極的友人関係」であり、性差については女子が「学習不適応感」「充実感・将来の展望の欠如」を強く感じ、男子が「消極的友人関係」「非能動性・無力感」を強く感じている。下位カテゴリー間の関連は全般的にあまり相関が認められていないが、「消極的友人関係」と「学習不適応感」や「充実感・将来の展望の欠如」との間に弱い相関が認められている。日常生活との関連は、全般的にそれほど強い関連ではないが、「学習不適応感」「充実感・将来の展望の欠如」「消極的友人関係」は全ての変数と有意な相関が認められ、得意な、好きな教科が少なく、不得意な、嫌いな教科が多く、通塾している児童・習い事をしている児童はそうでない児童より「学習不適応感」や「消極的友人関係」をあまり感じていない。本研究で作成された無気力感を測定する項目は、下位カテゴリー間での項目移動や重構造をもつ項目、信頼性の不安定な因子、項目数の少ない因子などがあり、妥当性・信頼性が十分とは言えず、項目を精選する必要があると考えられる。

天貝(1995)は、Eriksonが指摘するように、自我同一性の獲得に信頼感が重要な役割を果たすが、信頼感を実証的に取りあげた研究は少ないとし、信頼感を実証的に捉えた1人であるRotterが信頼感を単一次元で構成されていると仮定しているものの、これに矛盾する複数の次元を示唆する知見に発意を得、新たに多次元的に信頼感を測定する尺度を作成し、高校生における自我同一性の獲得と信頼感との関連を検討している。研究1において信頼感尺度の作成を目的に、信頼感尺度項目は、先行

研究の知見や信頼についての哲学的考察を基に作成された項目、先行研究で開発された尺度項目の他に、信頼感場面についての自由記述を基に作成された項目などから収集され、内容的妥当性の検討の結果、41項目が残された。信頼感の尺度は、高校生を対象に実施され、バリマックス回転による因子分析が行われ、「自己信頼」「他者信頼」「不信」「基本的信頼」の4因子が析出されたが、 α 解および主因子法による因子分析を行った場合、自己信頼、他者信頼、不信の3因子が安定していたが、基本的信頼の因子は不安定であったため、今回の研究では除外され、最終的に24項目が残された。これらの項目を、再び高校生を対象に実施され、主成分分析を行い3因子が抽出され、項目選定の際に仮定された「不信」「自己信頼」「他者信頼」に対応しており、信頼性を検討するため、 α 係数、折半法による信頼性係数、2カ月間隔で再テスト法による相関を求めたところ満足すべき値が算出され、各因子について α 係数を求めたところ、いずれの因子においても高い値が得られ、尺度全体においても、尺度内の各因子においても十分な整合性が得られている。研究2において信頼感と自我同一性との関連が検討され、高校生を対象に、信頼感尺度、自我同一性地位判別尺度を実施し、信頼感各下位尺度と同一性地位を構成する「現在の自己投入」「危機」「未来の自己投入の希求」の3変数それぞれとの相関を調べるため、3変数の得点を目的変数、信頼感各下位尺度得点を説明変数とする重回帰分析を行い、自己信頼と他者信頼は「現在の自己投入」「未来の自己投入の希求」を予測し中程度の説明率があるが、不信と他者信頼は「危機」を予測しているものの説明率は低い。同一性地位の6類型から「同一性達成」「積極的モラトリウム」「権威受容」「拡散」の4地位を取りあげ、同一性地位と性を2要因とする分散分析を行い、信頼感全体では地位差と性差が、不信は地位差が、自己信頼は地位差と性差が、他者信頼は地位差と性差が有意であり、同一性拡散地位は最も不信が高く、自己信頼、他者信頼が最も低く、積極的モラトリウム地位は男子で自己信頼、他者信頼が最も高く、女子で不信が最も低いことが見出されている。天貝は、発達課題の完成型である達成地位において信頼および不信が最も高いあるいは最も低い得点を示す結果にならなかったことについて、信頼感と不信感の絶対的な量ではなく、むしろ質や信頼・不信のバランスが重要であると考えている。この研究は、高校生の自我同一性と信頼感との関連を検討したものであるが、先行研究では高校生の自我同一性地位が傾向として権威受容と同一性拡散とに大別されるという知見を、どの程度考慮に入れて検討したものであるのか読んでいて伝わってこないが、積極的モラトリウムや同一性達成に向

けて始動し始める時期の大学生に行ったならば、また別の結果が得られたのではないかと考えられる。

岡田(1995)は、現代青年の友人関係の特徴が青年自身の自己概念とどのような関連があるかを、自己意識と理想自己像・現実自己像との関連から検討し、同一の被調査者に第1次調査として、友人関係尺度、自尊感情尺度、自己意識尺度を実施し、8ヶ月後に第2次調査として、SD尺度形容詞対中学生用から11の形容詞対を選定し、自他認知の肯定的側面と否定的側面とを別個に調査するため、片側だけを提示する単極尺度に改め、理想自己像、負の理想自己像、現実自己像、同性の親友像について評定を求めている。友人関係尺度の因子構造を確認するため、主因子法とバリマックス回転による因子分析を行い、「気遣い」「ふれあい回避」「群れ」の3因子を析出し、友人関係尺度各因子の合成得点を変量としたウード法によるクラスター分析を行い、3つのクラスターに収敛したところで、クラスター間の各因子得点の比較を行い得点の高低から、第1クラスターを「群れ関係群」、第2クラスターを「気遣い関係群」、第3クラスターを「関係回避群」と命名し、因子得点を基に回答者のクラスター分類を行い、また自他認知項目の因子構造を確認するため、主因子法による因子分析を行い、肯定項目・否定項目それぞれ2因子ずつ、肯定の「静的」「動的」の2因子が、否定の「静的」「動的」の2因子が抽出されている。群間での自尊感情得点、自己意識尺度得点の比較を1要因の分散分析で行い、私的自意識においてのみ群間の差異が認められ、群れ関係群が他の2群より得点が低いことが見出している。群間での理想自己像、現実自己像、親友像それぞれの得点の比較を1要因の分散分析で行い、肯定項目・否定項目とも現実自己像のみ群間の差異が認められ、肯定一静的、否定一静的では群れ関係群が他の2群より低く、肯定一動的、否定一動的では群れ関係群が他の2群より高く、群ごとに理想自己像、現実自己像、親友像間の比較を1要因の分散分析で行い、肯定一静的因子では、いずれの群においても理想自己像が最も肯定的で、親友像、現実自己像が続き、肯定一動的因子では、気遣い関係群において理想自己像と親友像が現実自己像より肯定的で、関係回避群において親友像が最も肯定的で、理想自己像、現実自己像が続き、否定一静的因子では、いずれの群においても現実自己像が他の2つの群より否定的であり、否定一動的因子では、いずれの群においても現実自己像が最も否定的であり、親友像、理想自己像が続いている。自他認知間の相関は、群れ関係群において、肯定一動的および否定一静的因子に現実自己像と親友像との間に中程度の正の相関が、気遣い関係群において、否定一静的および否定一動的因子に現実自己像

と理想自己像との間に、否定一動的因子に現実自己像と親友像との間に、それぞれ中程度の正の相関が認められたが、関係回避群では三者間に相関が認められなかった。

落合・佐藤 (1996) は、心理的離乳の 5 段階過程仮説を提示し、青年がどのような親子関係にあるのか、青年期の親子関係のあり方を分析し、親子関係の発達的变化を検討している。親子関係の項目の収集が行われ、項目内容の類似性などの観点から整理選定し、5 段階それぞれを測定する計 86 項目が整理された。親子関係項目は、中学生、高校生、大学生を対象に実施され、母親、父親別に、主因子法と Promax 解による因子分析が行われ、いずれにおいても 6 因子解が最適とされ(寄与率 39.26%)、ほぼ同じ内容の因子が抽出された。母親に対して、因子は順に項目内容から「子が親から信頼・承認されている親子関係 (T)」「親が子を危険から守る親子関係 (P)」「親が子と手を切る親子関係 (C)」「親が子を頼りにする親子関係 (R)」「子が困った時には親が支援する親子関係 (S)」「親が子を抱え込む親子関係 (H)」と命名された。父親に対しては、因子は順に「子が親から信頼・承認されている親子関係 (T)」「親が子を危険から守る親子関係 (P)」「親が子と手を切る親子関係 (C)」「子が困った時には親が支援する親子関係 (S)」「親が子を抱え込む親子関係 (H)」「親が子を頼りにする親子関係 (R)」と命名された。この親子関係の内容は、前述の 5 段階仮説の親子関係と対応していたが、実際には 6 種類あることが示された。母子関係から見た親子関係の発達的变化について、学校段階、男女、6 種類の親子関係などの要因を考慮した 3 要因の分散分析を行い、H は、学校段階の主効果のみに有意差が認められ、中学生 > 高校生 = 大学生 = 院生であり、P は、学校段階と性別の主効果に有意差が認められ、女子が男子より高く、学校段階は中学生 > 高校生 > 大学生 = 院生であり、S は、学校段階と性別の主効果に有意差が認められ、女子が男子より高く、学校段階は有意差がないが中学生 = 大学生 > 高校生であり、C は、学校段階と性別の主効果に有意差が認められ、男子が女子より高く、学校段階は有意差がないが中学生 = 高校生 > 大学生であり、T は、学校段階の主効果のみに有意差が認められ、院生 = 大学生 > 高校生 = 中学生であり、R は、学校段階と性別の主効果に有意差が認められ、女子が男子より高く、学校段階は、院生 > 大学生 > 高校生 = 中学生であることが示されている。父子関係から見た、同様の発達的变化について、同じ 3 要因の分散分析を行い、H は、学校段階、性別のいずれの主効果にも有意差が認められず、P は、学校段階と性別の主効果に有意差が認められ、女子が男子より高く、学校段階は、中学生 > 高校生 > 大学生 = 院生であり、S は、学校段階、性別のい

ずれの主効果にも有意差が認められず、C は、学校段階と性別の主効果に有意差が認められ、男子が女子より高く、学校段階は、中学生 = 高校生 > 大学生 = 院生であり、T は、学校段階の主効果のみに有意差が認められ、院生 = 大学生 > 高校生 = 中学生であり、R は、学校段階の主効果のみに有意差が認められ、院生 > 大学生 = 高校生 = 中学生であることが示されている。母子関係、父子関係に関する因子得点の変化の態様はほぼ同じであり、親子関係の変化の過程は母子・父子関係いずれの場合もほぼ同様と考えられている。本結果で注目されるのは、「親が子を抱え込む親子関係」と「親が子と手を切る関係」とが親子間の距離に関して好対照をなすが、これらの親子関係が中学生と高校生とに併存していることである。青年期の各時期にみられる母子関係の特徴について、学校段階別ではいずれの段階においても 6 種類の親子関係の得点に有意差があり、中学生は $P > H = S = C > T = R$ であり、高校生は $C = P = H > R = T = S$ であり、大学生は $T = R > S > C = H > P$ であった。父子関係について、学校段階別ではいずれの段階においても親子関係の得点に有意差があり、中学生は $P > H = S = C = R > T$ であり、高校生は $C = P = H > R > S = T$ であり、大学生は $T > S = R > H = C > P$ であり、院生は $T = R > H = S > C > P$ であった。母子・父子関係を含めた親子関係の特徴をまとめるならば、中学生は「親が子を危険から守る親子関係」が他の親子関係より多くみられ、「親が子を頼りにする関係」「子が親から信頼・承認されている親子関係」はあまりみられず、高校生の親子関係は多様で顕著な特徴があまりみられないが、「子が困ったときには親が支援する親子関係」「親が子を頼りにする関係」「子が親から信頼・承認されている親子関係」はあまりみられず、大学生になると、「親が子を危険から守る親子関係」はずっと減り、代わりに「子が親から信頼・承認されている親子関係」が多くみられるようになり、さらに年齢の進んだ院生では、「子が親から信頼・承認されている親子関係」とともに「親が子を頼りにする親子関係」が多くみられるようになっている。学校段階を通してみたとき、高校生から大学生への間に大きな親子関係の変化期であることが示されている。

落合・佐藤 (1996) は、青年期の友人関係がどのように変化していくかについて研究したものは僅少であることから、青年期にみられる友達とのつきあい方とその発達的变化を検討している。友達とのつきあい方に関する質問項目が作成され、35 項目が整理収集され、中学生、高校生、大学生を対象に実施し、主因子法による因子分析として因子数を決定し、Promax 回転による因子分析を行い、6 因子解とし(寄与率 45.09%)、6 因子の抽出順とそ

の負荷量の高い項目が男女それぞれと男女を込みにした結果とがほぼ同じであったため、男女を分けずに分析を行っている。抽出された因子は、「本音を出さない自己防衛的なつきあい方 (防衛的)」「誰とでも仲良くしていきたいというつきあい方 (全方向的)」「自分に自信を持って交友する自立したつきあい方 (自己自信)」「自己開示し積極的に相互理解しようとするつきあい方 (積極的相互理解)」「みんなと同じようにしようとするつきあい方 (同調)」「みんなから好かれることを願っているつきあい方 (被愛願望)」であった。この一次因子分析によって得られた6因子間の相関と因子の内容をみて、6因子間の関連が均等ではなくまとまりがあると考えられたため、一次因子分析での因子得点をデータ行列とした二次因子分析を行い、主因子法により2因子数の決定後、Promax 回転を試みている (寄与率53.3%)。抽出された二次因子は、第Ⅰ二次因子が防衛的に正の、積極的相互理解や自己自信に負の負荷量を示すことから「人とのかかわり方に関する姿勢」と、第Ⅱ二次因子が全方向的や被愛願望、同調と正の、一次因子のつきあいの範囲を限定した項目と負の負荷量を示していることから「自分がかかわろうとする相手の範囲」と解釈している。友達とのつきあい方の発達の变化を検討するため、学校段階、性別、友達とのつきあい方を要因とした3要因混合計画の分散分析が行い、防衛的は学校段階の主効果に有意差があり、学校段階間の差は中学生>高校生=大学生であり、全方向的は学校段階の主効果に有意差があり、学校段階間の差は中学生=高校生>大学生であり、自己自信は学校段階の主効果に有意差は認められず、積極的相互理解は学校段階の主効果に有意差があり、学校段階間の差は大学生=高校生>中学生であり、同調は学校段階の主効果に有意差があり、学校段階間の差は中学生>高校生>大学生であり、被愛願望は学校段階の主効果に有意差があり、学校段階間の差は大学生=高校生>中学生であった。続いて、二次因子得点についても同様に3要因の分散分析を行い、第Ⅰ、第Ⅱ二次因子いずれにおいても、学校段階の主効果に有意差があり、順に中学生>高校生=大学生、中学生=高校生>大学生であり、中学生から大学生への年齢が増すにつれての変化は、「友達とのかかわり方の姿勢」が高校生の間に防衛的な姿勢から友達と積極的に関与しようとする姿勢に変わり、「自分がかかわろうとする相手の範囲」が高校生までは誰とでも広くつきあおうと考えるが、大学生になると限定された狭い範囲の人とのつきあいに変化していくことを示している。同性の友達とのつきあい方の性別による差異は、前述の一次因子得点への分散分析で性別の主効果に有意差が認められ、女子が男子より得点が高かったものは、全方向的、同調、被愛願望、積

極的相互理解であり、男子が女子より高かったものは自己自信であり、防衛的は有意な性差を認めていない。二次因子得点の分散分析は、第Ⅰ二次因子に性差は認められず、第Ⅱ二次因子に有意な性差が認められ、女子が男子より得点が高い。落合・佐藤は、性差について、女子は、友人と理解しあい、共感し共鳴しあうといった、お互いがひとつになるような関係を望んでいることを、男子は、自分に自信を持ち、友達と自分は異なる存在であるという認識をもって友達つきあいをしていること、女子は男子に比べて、つきあう相手を限定したり選択したりしないつきあいをしていることを示すと考えている。

(3) その他

その他、人格に関連する研究として、社会心理的な研究がみられる。

平他 (1995) は、基底的な民族アイデンティティのあり方そのものに変化がなくとも、対人関係の状況の中で一時的に自分の民族的アイデンティティの意識の強弱が変化することを「民族的アイデンティティの状況によるシフト」と呼び、在日朝鮮人青年を民族的アイデンティティの変容やシフトが起こりやすい層と位置づけ、その民族的アイデンティティの様相を検討している。被調査者として倫理的な問題を避けるため、「明らかに在日朝鮮人という民族的アイデンティティを持っている青年」を対象に、①本名と通名の使い分け、②同一性、③在日朝鮮人としての「生き方」と民族的意識の強さ、④将来の民族的志向性、⑤家庭内での民族的経験、⑥民族的知識、⑦朝鮮語の能力、などの質問項目が用意された。①の結果は、「本名の朝鮮語読み」の使用比率が高い場面では「本名の日本語読み」「通名」の使用比率が低く、「本名の朝鮮語読み」を使用する割合は、「見知らぬ同胞関係者」「同胞の友人と一緒にいる場面」「外国人と一緒にいる場面」「家族、親類と一緒にいる場面」「継続的に日常接する日本人集団」「接触の度合いや重要性の低い日本人集団」の順で低下していく。本名と通名との使用によるタイプの分類は、タイプⅠ (全ての場面で一貫して朝鮮語読みを使用する者)、タイプⅡ (全ての場面で本名を用いるが、朝鮮語読みと日本語読みを併用する者)、タイプⅢ (本名と通名を場面によって使い分ける者)としたとき、それぞれの割合は24.7%、21.5%、53.8%であった。本名、通名使用のタイプと抵抗感との関連は、いずれの使用においてもタイプ間で差異があり、タイプⅠは本名使用の抵抗感が最も弱く、通名使用の抵抗感が最も高く、タイプⅢは本名使用の抵抗感が最も高く、通名使用の抵抗感が最も低い。②、③、④の結果は、本調査対象者が「在日朝鮮人」としての意識を強く持っていること、「生き方」は「祖国志向」「同胞志向」「共生志向」「個人志向」が非常に強く、愛着の強さは「在日同胞」「出身

地域」「祖国」「日本」という順序が明確であることが示されている。⑤や⑥、⑦に関して、家庭内で体験するであろう民族的経験に関する内容を19項目収集し、主因子法で因子数を決定した後、Promax 回転を行い、「儀式」「日常的な民族文化的要素」「祭祀」と命名され、各因子得点、民族的知識、朝鮮語の能力それぞれに対し、タイプを要因とした1元配置の分散分析を行い、日常的な民族文化的要素ではタイプIがタイプIIIより、地理の知識ではタイプIIがタイプIIIより、文化の知識ではタイプIがタイプIIIより、朝鮮語の文章理解力、朝鮮語の会話力ではタイプI、IIがタイプIIIよりそれぞれ高いことが示されている。平他は、目的とした民族的アイデンティティのシフトを被調査対象者に見出していないが、その理由を彼らが主観的にはっきりと「朝鮮人」という民族的アイデンティティを持つ者であったためと考えている。代わって、タイプIIIの者に象徴的に示されるように、肩肘を張らない「しなやかな民族的アイデンティティ」とでも呼ぶべきものを在日朝鮮人青年層の中に見出している。海外の文献では、民族的アイデンティティの状況によるシフトを示そうとした研究はさして少なくない。しかし、本研究が研究目的の検証に成功していると言い難いが、

日本においてそれを実証的なデータとして示そうと試みた最初の研究かと思われる。

引用文献

- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教心研, 43, 364-371.
- 土肥伊都子 1996 ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教心研, 44, 187-194.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤真一・長田由紀子 1995 特性的自己効力間尺度の検討：生涯発達の利用の可能性を探る 教心研, 43, 306-314.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教心研, 44, 11-22.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教心研, 44, 55-65.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・有人像に関する考察 教心研, 43, 354-363.
- 平 直樹・川本ひとみ・榎 栄根・中村俊哉 1995 在日朝鮮人青年にみる民族的アイデンティティの状況によるシフトについて 教心研, 43, 380-391.